KOBUNSHA

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙にはご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社出版局
神吉晴夫

長編小説　自由ヶ丘夫人

昭和35年8月1日　初版発行

¥ 160

著者　武田繁太郎（たけだしげたろう）
東京都三鷹市牟礼874

発行者　神吉晴夫

印刷者　山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所　東京都文京区音羽町3　株式会社　光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　〔藤田製本〕

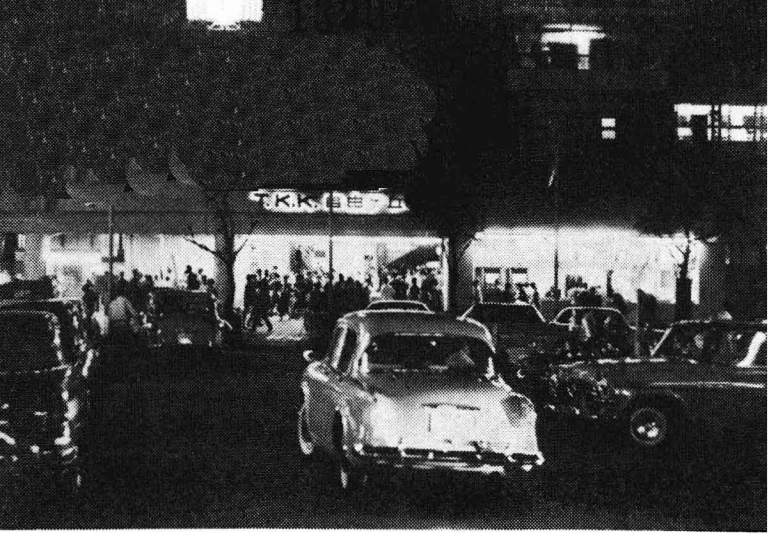
表紙の模様・意匠登録　116613

© Sigetarô Takeda 1960

長編小説

自由ヶ丘夫人

武田繁太郎



目次

一　ダンスをしましょう……五
二　池上夫人の場合……二七
三　別宮夫人の場合……四八
四　初陣のパーティー……六六
五　逢いましょう……八五
六　空の恋・地上の恋……一〇四
七　嘘も方便……一二九
八　ナイーブな、あまりに！……一四三
九　知らぬが仏……一六二
十　虹をつかむ男……一八〇
十一　恋愛と情事の間……一九五
十二　歎きのフィナーレ……二一四
あとがき……二三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

カット・山本正

一　ダンスをしましょう

このよく気のあった六人の夫人たちのあいだで、ダンスのお稽古をはじめましょうよという動議がさいしょに持ちだされたのは、週二回の『T御料理学園』の講習をすませたあと、いつもお茶を飲みながらおしゃべりを愉しむことにしていた喫茶店『エトアール』へ、一行がぞろぞろと立ち寄ったときである。

初秋のよく晴れたある日の午後だった。

この『エトアール』の二段になって奥ぶかくひろがっている店内の片側の壁は、いちめん幻想的な美女の群像が乱舞していた。室内装飾家として著名なS・M氏の製作になるこの壁画は『エトアール』の呼び物の一つとしてかなりひろく世間に知られていた。

その夢見るようにうっとりと瞳をとざした美人像の長い裳裾が、床ちかくまで垂れさがっているちょうど真ん前の卓子に、いつものように夫人連が向かいあって席を占めたとき、まず口火を切ったのは滝田夫人だった。彼女の良人はN電器の取締役兼総務部長をしていた。

「どなたか、ダンスお得意？」

自分はできないんだけど、といった表情で滝田夫人は一同を見まわした。

「あたくしは、全然だめ」

真っ先に頸をふってみせたのは、K信託の調査部長を良人に持つ入江夫人だった。

「あたくしもだわ」

「あたくしもよ」

他の三名の夫人連も口々にこう答えたが、ただ一人残った別宮夫人は、みんなが返答するのを待っていたか

のように徐ろに言った。
「あたくし、まえに少し踊ったことがありますわ」
「あら！　別宮さん、お踊りになれるの？」
枝村夫人がもっけ顔でたずねかえした。もう何年にもなる付合いで、彼女は別宮夫人にダンスができるなどという話はついぞ耳にしたことがなかったからだ。
「踊れるって、ほんのちょっと。真似ごとだけですわ」
本音なのか、謙遜しているのか、そのどっちともとれる曖昧な、だが、やや得意げな微笑で別宮夫人は言った。なにごとにまれ他人のできぬことを自分一人がやれるというのは、無条件にたいへんいい気持のものである。
「そう。そりゃちょうどようございたわ。おできになるんなら、みんなして教えていただきましょうよ」
「お教えするなんて――そんなこと」別宮夫人はこんどはあわてて頸をふった。「――とんでもないことですわ」
正直な話、彼女はまだ結婚まえに良人といくどか踊ったことがあるだけだった。考えてみると、あれからもう十年もの歳月が流れている。
しかし、こうして六人の夫人たちのうち、五人までもダンスができないという事実を、だからといって時代おくれだなどとわらうのは酷だったろう。
彼女たちはみなそれほど若くもなく、またそれほど年輩でもなかった。詳しくいえば最年少の矢島夫人が二

十九歳、最年長の滝田夫人が三十四歳、あとの四名はそれぞれその中間に位し、要するに彼女たちはいま、いわゆるあぶらの乗りきった女ざかりを迎えていたわけである。

ということは、戦後まもなくこの国の若者たちのあいだでダンス・ブームが巻きおこったとき、ちょうど彼女たちもまた娘時代であった。

だが、若い男や女なら猫も杓子もダンス熱にうかれきっていた当時の風潮が、むしろ逆に育ちのいいこのお嬢さんがたを流行の圏外に追いやった。まさしく猫族も杓子族も、ショップ・ガールから女中まで眼の色を変えてダンス・クラブへ通いだした現象が、どうやら彼女たちの家庭の属する階級のお気に召さなかったようである。この傾向は当時の彼女たちの家庭の経済状態のいかんを問わなかった。

たとえば枝村夫人。彼女の厳父はT大学の歴史学の教授であったが、愛嬢が気のあったクラスメートとダンスを習いたいと許しを請うたとき、子煩悩で有名だった教授も、さすがにこの愛嬢の願いだけは断乎として退けた。

「滅相もない。あんなものは、はしたない連中のまねる下品な遊戯です」

この戦前派のモラリストは「好色的な」という言葉が口に出かかって、あわてて「下品な」と言いなおした。

「だって、パパだって、むかしはお踊りになったんでしょう?」

「うむ。ウィーン時代にはね。社交上の礼儀として。だけど、あれとは違います」

老教授がドイツへ留学したのは弱冠二十一歳、それはまだ二十世紀の初頭であった。ウィーンの町には青白

い瓦斯灯の並ぶ石畳の舗道を、馬車が澄んだひずめの音をひびかせながら往き交うていた時代だ。ここはウィンナ・ワルツの本場。

そのクラシックな時代のなつかしい青春の想い出を持つ老教授にしてみれば、こともあろうにケンタッキーの田舎者やシカゴ生まれの黒ん坊たちの、やたらに尻をふる猥雑なアメリカン・スタイルのダンスで、かわいい娘を引っかきまわされ、あげくの果て変な虫でもついてはたまったものではなかった。

理由に大同小異はあっても他の夫人連もみな似たようなケースで、とうとうあの熱狂的なダンス熱には罹患せずに娘時代を通過したまま、それぞれにやがて人も羨む幸福な結婚をした。

そうしてさて結婚後は——おしなべて彼女たちの良人は、ダンスというものは妻と踊ってもべつだん差支えないものだということは承知していても、あえてそれを実行に移そうとするものは一人もなかったのである。これは、結婚まえに、未来の妻をいくどかダンス・ホールへ引っぱっていったこともあるという別宮氏にしても例外ではありえなかった。

それぞれに立派な社会的地位と経済的繁栄とを確立していながら、彼らはあたかも初心な少年のように素面で妻のからだを抱いて踊るのがどうにも照れくさくてならぬようであった。総じて彼らは酔っぱらわねばあのダンスのリズムを思いだせぬのだ。

つまり彼らのたしなむダンスといえば、あのバーとかキャバレーとか称する薄暗い部屋のなかで、まずアルコールを体内に流しこんだうえ、昼間みればおそらくは愛妻よりも三分の一ぐらいしか美しくはない給仕女を抱いて立ちあがり、一坪にもたりぬ鼻を突くような狭い空間を、タンゴもワルツもマンボもお構いなしにただ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

くねくねとからだをくねらせながら、隙をみては給仕女のお尻や胸のあたりをいじっては悦にいる奇妙な運動を意味していた。別宮氏がかつて夫人と踊ったというダンスも、じつはこれとほぼ同類であって、良人以外の男性と踊った経験のない別宮夫人は、だからいまでもダンスとはこんなものだと思いこんでいた。

こういう経緯を知ってみれば、女ざかりを迎えているはずのこの夫人連が、いまだにダンスができぬという事実をもうだれもふしぎがるものはいないだろう。要するに彼女たちにはダンスに親しむチャンスがなかっただけなのである。

だが、——そのチャンスが、いま意外な身近さで彼女たちにちかづきつつあった。

「別宮さん、ほんとうに教えていただけませんの？」

滝田夫人がまだ半信半疑の体で言った。

「だって、あたくし、だいいち男のかたのステップを全然存じていませんもの。駄目よ」

「そう。あとはどなたもご存じないとすると、ちょっと困ったわね」

滝田夫人がもういちど一同を見まわして言った。

「でも、大丈夫よ。クリスマスまでには、まだだいぶ間があるんですもの。それまでにみんなでなんとか覚えられますわよ」

最年少の矢島夫人が、ちょっと若さを誇示するように楽観論を持ちだした。

「そうよ。ダンスって、そんなにむずかしいものでもありませんもの」

別宮夫人が先輩らしく体験を披瀝した。なるほど彼女が良人に習ったようなダンスなら、ひと晩あれば十分だった。

そこへ注文したポット入りの紅茶とケーキとが運ばれてきた。ケーキは揃って夫人連が愛好するシュークリームだった。この店のシュークリームは大人の握り拳ほどもある、ばかでかい大型なことで有名だった。

「でも、お稽古するとしたら、やっぱり教習所のようなところへ通わなければ駄目なのかしら？」

入江夫人が心細そうに言った。この自由ヶ丘駅前の繁華街にも一軒ダンス教習所があった。『ムーンライト』という気取った名だが、飲み屋や焼鳥屋に囲まれた薄汚ないバラック建てのような教習所には、夫人連が一瞥したところによると、あまり品のよくない若い男や女が出入りしていた。そういう場所へ通う野蛮な勇気が入江夫人にはとうてい持てなかったのである。

「大丈夫よ。教習所へ通わなくても、自宅教授って方法もあるんじゃございません？　ねえ、別宮さん」

大丈夫よ、が口癖であるらしい矢島夫人がすぐ言った。

「そうね。身元のたしかなダンス教師に出張教授させればいいんですわ」

「それなら、こういうプランどうかしら？　お料理のお稽古のない日に、教室はみなさんのお宅の応接間を回り持ちで使っていく」

「いいプランじゃありませんの、とっても。だけど、肝心のダンスの先生、どなたか心当たりおありになる？」

「あたしはないわ」

「あたくしも」

猫の首に鈴をつけねばならぬ鼠族のように、夫人連のプランはそこではたと行きづまってしまった。

だが、こういうときにはきまって〝大丈夫よ〟の矢島夫人が名案を思いつくのだった。

「大丈夫よ。あたくし『ルノアール』のママさんにきいてみますわ。あのかた顔がおひろいから、きっといい先生をご紹介してくださると思うの」

なるほど、このママさんを思いださなかったのは他の夫人連には、うかつ千万だった。『ルノアール』は彼女たちが常連になっている広小路通りの仕立て専門の洋裁店である。

「そうね。そりゃいいところに気がつかれたわ。じゃ矢島さん、『ルノアール』のママさんのほうは、あなたにお願いしてよ。ともかくお稽古はじめるんなら、一日でも早いほうがいいわ」

そういうことで、この場合の衆議は一決した。たしかに時日はそれほどの余裕を彼女たちに与えてはいなかったのである。

クリスマス・イブのG校P・T・A主催のダンス・パーティー。G校の教材整備補助金募集が目的のこのパーティーで、P・T・Aの役員である彼女たちは、当夜は主人役になって大張切りで活躍しなければならなかったのである。

もともとこの夫人連がグループをつくるようになったのは、彼女たちの子弟が通学している私立G小学校のP・T・Aの会合で顔をあわせるようになってからである。

子弟たちは目下三年生であった。その共通した学年の息子や娘たちを持った夫人連は、やがて三年後の中学

入試のさいには、互いに敵となって火花を散らさねばならぬ運命にあったが、いまはいちおう小休止の平和共存時代であった。そして、幾百人もの父兄のなかからとくにこの夫人連が友情を感じあうようになったのは、ほぼおなじ世代に属しているということのほかに、彼女たちの良人がほぼ似たような社会的地位と経済的安定とを保持しているという事実であった。

このことは重要であった。なぜならもしこのグループに、田園調布あたりに豪壮な邸宅を構え、車庫にはパパ用、ママ用、ボク用のスポーツ・カーと米国製の新車を三台も納め、パパは財界の大立物の一人だなどと称する夫人がまぎれこんだとすれば、夫人連は我慢のならぬコンプレックスから、この夫人をグループのそとへいびりだしたことであろう。そして、もしまた逆に課長あたりのしがないサラリーマンの細君がうっかりまぎれこんでこようものなら、やはり夫人連は眉をしかめて彼女をグループのそとへ弾きだしたことであろう。

そして、このような心理の動きはまた、自由ヶ丘という戦後にわかに成りあがったこの新興住宅街のランクをきめるうえに、かなり重要なデーターともなった。

夫人連の友情は、それが自然の勢いであったようにP・T・Aから街頭に進出し、やがて『T御料理学園』という恰好の場に定着した。

みずからの学園名に「御」の字をいれて、自由ヶ丘夫人たちの虚栄心と社交性とを満足させる術を心得たこの園長は、講師にずらりと二枚目の美男子を並べて夫人連のご機嫌をとりむすんだ。だが、この商法には二重の狙いがあった。そのようにして美男子を置いても、夫人連とのあいだに醜聞は起こりえぬであろうという計算が、その正確な計算どおり、料理人風情に誘惑されてはたまるものかという夫人連の貞節心と自尊心とを

刺激することに大いに役立ったのであった。

『T御料理学園』は見事に繁昌し、園長は俗名をたかめテレビやラジオの料理の時間に引っぱり凧になった。その園長のもと、夫人連も女学生のむかしにかえったように嬉々として御料理学園に通い、帰りにはその日習った料理のおなじ材料を揃えるために駅前のマーケットや商店を片っぱしから荒らしまわった。

しかし、こうしたケースの友情で連合したこのグループに、ただ一人だけ異端者が混っていた。それは池上夫人だった。

彼女がこのグループに加わったのは、偶然枝村夫人が隣家の住人で以前から親しかったからであったが、彼女が異端者であるという理由は簡単だった。彼女には子供がなかったからである。

さいきん危険な自由ヶ丘などという思わせぶりなキャッチ・フレーズでジャーナリズムに騒がれた奇態な事件がこの街に発生した。駅前のS銀行の建築現場で地下水をやたらと汲みあげたため、その水道筋に当たる地上の各所で地盤沈下がはじまったのである。運わるく道筋にぶつかっていた『ルノアール』でも、仕事場の椅子がひっくり返るほどのかなりひどい沈下がおこった。裁断用の巻尺ではかってみると仕事場の裏側の柱が十センチ近くも沈み、床や壁のいたるところに気味のわるい亀裂が生じていた。

「ばかにしてるわね。銀行屋なんて」

銀行からは一銭の融資も受けた覚えのないマダム・ヤマカワはぷんぷん憤慨しながら、損害賠償をとるため

に、商店連合会の事務所へ掛けあいに出かけていった。

以前から水ではさんざ苦労させられていた。台風でもきて大雨が降ると、擂鉢の底にあるようなこの街は周囲の高台から雨水が流れこみ、たちまち店内に浸水して椅子や卓子がぽかぽかと浮きあがる始末であった。だからこそこの商店街は雨水が流れこむように八方から客が流れこんできて、戦後こんなに商売が繁昌するようになったのだと、縁起かつぎの好きな商人どもは大まじめにばか喜びしていたが、マダム・ヤマカワはむろんそのばかな迷信はあたまから黙殺した。戦後十五年、女手ひとつでよくこの『ルノアール』の店を支えてきた彼女はなかなかのリアリストであった。とともに終戦直後からこの街の広小路の一角に住みついた彼女はいまでは主のように、この街の表側よりも裏側の事情に通暁していた。

じっさい十何年間も毎日店に出入りする口さがないご婦人連の噂話を聞かされていては、マダム・ヤマカワのゴシップ帳が無限の高さで積みあげられてゆくのは自明の理であった。

だれかからあるゴシップのより詳細な内幕をたずねられると、マダム・ヤマカワはにっこりと微笑しながら彼女の記憶にひめられた膨大なゴシップ帳のなかから素早く適当な一冊をぬきとり、ぱらぱらとページをめくって、得意の弁舌でおどろくほど正確な情報を提供して相手を瞠目させた。

戦前年下の男と内地から駆落ちしてシナ大陸を流れ歩き、大陸浪人になりさがった男と喧嘩別れしたあと、上海でフランス人から洋裁の技術をマスターしたというちょっと得体の知れないこの中年のデザイナーは、しかし、その巧みな弁舌に劣らず腕もたしかだった。

「生地はどうぞご自由によそのお店で選んでお持ちください。わたくしどもの店では、生地はいっさい扱いま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto